

中国・アジアのダイナミズムに 目を向ける

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役

土田 浩

中国のGDPが日本を抜いて世界第2位に躍り出たのは2010年のこと。それからわずか7年、今や中国のGDPは日本の2.4倍の規模に達している。日本は世界第3位の経済大国に変わりないが、中国の背中では遥か彼方に遠のいてしまった。

世界の自動車販売台数をみると、昨年の1位は中国の29百万台で、2位米国の17百万台を大きく上回っている。3位は日本の5百万台だが、すぐ後ろにはインドが4百万台と迫ってきた。

世界はAI、IoT、FinTechなどに代表される第4次産業革命の真っ只中にある。まだ未成熟ながら、技術革新は日進月歩であり、ビジネス上も消費者個人としても、先々これに背を向けて生きることは許されなくなった観がある。その技術の先端に行くのは、米国と並んで中国である。日本は、先端工業技術でも、いつの間にか中国にも大きく水をあけられてしまった。

科学技術の先進性もさることながら、注目したいのは社会実装のスピードの速さである。先日、IMF・金融庁・日本銀行共催のFinTechシンポジウムに参加してきた。中国、タイなどアジア諸国のプレゼンターが直接語る、QRコードによる庶民の日常的決済の普及や、SNSの利用データを用いた信用調査の事例などの話が印象的であった。ためらいなく新技術を取り入れ、過去の仕組みから乗り換える姿勢。そこには大胆さと潔さ、突き詰めれば時代変化に適応する覚悟のようなものが感じられた。

中国やアジア新興国における社会実装の速さの源はどこにあるのだろうか。サービスを提供するベンチャー企業、利用方法を習得し受容する消費者、産業育成や法令整備などを担う政府、

そしてその土台となる社会制度や国民意識。実態を分析し、学ぶべきところは採り入れる価値があると思う。勿論、日本には真似できないこと、真似すべきではないことが沢山あるのは承知の上だ。

確かに日本には、既に成熟したレガシーがあるため、移行メリットが小さいという事情はある。それでも、グローバル化が一層進展する将来に向けて、ガラパゴス化の道を選択することは危険な賭けと言わざるを得ない。少なくとも、こうしたスピード感のある国がグローバル市場における競合相手であることは、しっかり頭に入れておく必要がある。

私は、以前から素朴な疑問として、なぜ中国では道路などのインフラ整備が急ピッチで進むのだろうかと思っていた。理由として土地収用の事情や安全・品質要件の違いを指摘する向きが多いが、本当にそれだけで説明可能なのだろうか。むしろ本質的には、予算と人員を集中的に投下して一気に完成まで漕ぎ着け、所期の経済効果の迅速な発現を企図する基本思想や価値判断が根付いているためではないかと想像している。

翻って日本では、五年十年単位で工事中の現場が全国至る所で目に付く。案件採択や予算立案のプロセス等々、当事者の立場からすれば他に選択の余地のない意思決定なのだと思う。しかしながら、言うまでもなく、完成して実用に供するまでは、投下された資本と労働は何ら付加価値を生まない。日本では生産性向上が声高に叫ばれているが、こうした従来の枠組みの下でただ現場レベルのカイゼンを促すだけでは、マクロ経済レベルで有意な成果を生むには力不足ではないだろうか。

日本は、明治時代にはヨーロッパ諸国の制度・技術を積極的に取り入れ、列強諸国の仲間入りを目指した。戦後は、アメリカに追い付け追い越せの国民的エネルギーが経済躍進の原動力となった。

閉塞感の漂う昨今の日本には、斬新なパラダイムが必要だ。辛抱強い日本人も、そろそろ愚直な努力の積み重ねには限界を感じている。今度は、中国・アジアのダイナミズムから学ぶことがニュートレンドになる予感がしてならない。